



TITLE:

外文明と内世界

AUTHOR(S):

土屋, 健治; 河上, 倫逸; 白石, 昌也; 横山, 俊夫; 園田, 英弘; 西村, 重夫; 弘末, 雅士

CITATION:

土屋, 健治 ...[et al]. 外文明と内世界. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1994, 1: 68-73

ISSUE DATE:

1994-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187407>

RIGHT:

外文明と内世界

1. 研究組織

研究代表者：土屋 健治（京都大学東南アジア研究センター・教授）

研究分担者：河上 倫逸（京都大学大学院法学研究科・教授）

白石 昌也（横浜国立大学文理学部・教授）

横山 俊夫（京都大学人文科学研究所・助教授）

園田 英弘（国際日本文化研究センター・教授）

西村 重夫（京都大学東南アジア研究センター・助教授）

弘末 雅士（天理大学国際文化学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

この研究班のねらいは、地域が何らかのまとまりをもって成立する力学を、社会学者と人文科学者が共同で究明しようというところにある。

そこで前提とされているのはおおよそあらゆる地域において次の二方向のベクトルが並存しているということである。つまり、一方で、ある地域をそれ自身の固有性によって他と区別しこれを完結した共同世界として形成しようというベクトル、すなわち「内世界」形成へ向かうベクトルがあり、他方で、いくつかの内世界を同質化・共通化・普遍化させようというもう一つのベクトル、すなわち「外文明」がある。ある地域の固有性を把握するということは、内世界と外文明の間のこの連関の様相と相互作用の力学を解明することにほかならない。しかも肝心なことは、これを「外」の挑戦に対する「内」の応戦という視点では毛頭なく、内世界それ自身の主体的営為という視点において捉えることである。「外」はいつも「内」の問題として現象する。「外」は「内」に受容され「内」において定位されていく。このダイナミクスを研究主題にする。

次にわれわれの研究対象は、東南アジアの精神世界である。別言すれば東南アジア世界を物理空間・社会空間・意味空間の三つに分けた際の意味空間が研究対象である。ここに意味空間とはそこに住まう人々によって描き出される世界の姿かたちでありそのイメージである、ということができる。人々は時間についてさらに空間についてどのように了解するのか、その「了解の構造」とはどのようなものなのか、また、人々が共通にあるいは個別的に得ていく日々の経験、それがありきたりの経験であれ、尋常ならざる経験であれ、それに対して、どのようなかたちを与えるのか、そこに認められる「意味の構造」はどのようなものであるのか。これら

が、当面の研究課題・研究対象であり、そのために、言語とシンボル（儀礼、神話、民話、倫理、法、芸術等）を中心とした幅の広い分野が研究対象となる。

この研究は他のさまざまな研究グループとの間の共同研究として進められなければならない。意味空間論という研究分野を物理空間論ないし生態空間論、また社会空間論と連動させることが必要なのである。意味空間が生態空間や社会空間を超えて成立すること、また時として三者が相互にまったく無関係であることはいうまでもない。しかしそのことはこれら三者の間に働く関係性（もしくは無関係性）への問題意識を持たなくてよいことではむしろない。むしろ三者の間の生き生きとした対話こそがもっとも求められているのである。このような対話と親密な研究交流を通じて、東南アジアを全体的にみる視座、東南アジアをトータルに対象化しうる視座を持つことができるだろう。さらに又、このような視座は、東南アジア地域以外の研究者を含めることによってはじめて成立可能となるであろう。

このようにして、東南アジアそれ自体の研究を通して、たんに東南アジアだけでなく、広く人類が生み出してきた「文明と文化」についての原理的な問いかけを行ない、その行く末についての思索を深めることを目的とする。

3. 平成5年度の研究経過

平成5年度において研究班として5回の研究会を開催した。そのうち1回は計画研究B02班との合同研究会であった。

これらの研究会の概要は次のとおりである。

6月12日 第1回研究会〔於京都市〕

「研究テーマの紹介と研究計画」

7月16日～18日 第2回研究会〔於伊豆長岡町〕「『ジャワ世界』論へのこころみ」

「『ジャワ世界』試論」（報告者：土屋健治）

「ジャワの暦法」（報告者：高橋宗生）

「国民国家的人間類型」（報告者：西村重夫）

10月22日～24日 第3回研究会〔於三重県志摩郡〕

座談会「外文明と内世界をめぐって」

研究会「外文明と内世界：日本モデル」（報告者：園田英弘）

「外文明と内世界：スマトラモデル」（報告者：弘末雅士）

11月16日～18日 第4回研究会〔於洲本市、山影班との合同研究会〕

「ジャワをめぐる外文明と内世界」（報告者：土屋健治）

「ウチ・ソトの論理と関係の論理」（報告者：山影 進）

12月11日～12日 第5回研究会〔於福岡市〕

「外文明と内世界：比較法制史的視点から」（報告者：河上倫逸）

「ジャワ的歴史観：パラダイム提示のころみ」（報告者：青山 亨）

「貝原益軒とひとの国」（報告者：横山俊夫）

第1回研究会は、研究代表者が研究の目的と方法を述べ、各メンバーの研究テーマを検討し、1年間の研究計画をたてた。

第2回研究会では、高橋宗生氏をゲストスピーカーとして招き、土屋、西村の両班員が報告した。3人とも「ジャワ世界」をテーマとして報告し、ジャワ世界論をめぐる討論を重ねた。

第3回研究会では、班員全員が「外文明と内世界」をめぐる座談会を行なった。概念の整理、研究の視角と方法についてさまざまな問題点をあきらかにした。その後、スマトラと日本をケーススタディとして「外文明と内世界」のダイナミズムの具体例が提示された。スマトラについては弘末、日本については園田が報告した。

第4回研究会は、B02計画研究班「地域連関の論理」（研究代表者：山影進）との合同研究会を開催した。「ウチ・ソト」の論理について理論的な検討を加えた。なお、B01班を代表して土屋が問題提起を行なった。

第5回研究会では、ゲストスピーカーとして青山亨氏を招いた。班員からは河上と横山が報告した。それぞれに文明と文化に関する基本問題を、ヨーロッパ、日本、ジャワの事例を通して提示した。

これ以外に、総括班主催の公開講座（9月22日、於福岡市）では、土屋がシンポジウムのディスカスタントとして参加、同じく第2回研究集会（2月5日、於京都市）では、土屋が冒頭発言者となり、さらに総合シンポジウム（3月3日、於東京）では、弘末が討論者となった。

一方、これに関連して、個別に国内調査、海外調査が行われた。西村は長期にジャカルタに滞在して国民教育と国民統合の実態調査を行ない、白石はベトナムにおいて脱植民地化のプロセスを調査した。又、横山はドイツ、園田は米国において、文明論の研究に従事した。

4. 研究の成果とフロンティア

本年度の研究成果の概要は、季刊誌『総合的地域研究』第4号（1994年3月刊）に収められている。

そこでは第一に、外文明、内世界、外、内、文明、文化、世界等の研究班のキータームについての検討が加えられた。共通の了解事項として何をどこまで共有するのかという点が不完全ながら明らかにされた。他方、基本的概念のあいまいさについてもいくつかの問題点が指摘され、今後の課題とされた。

中でも問題とされたのは、「外」「内」を分ける根拠は何かという点であり、「外」と「内」を二項対立的に分けるのではなく「外」が「内」に入りこみ「内」が「外」へはみ出していく相互作用と両者の境界領域こそが重要であろうという点であった。これについては、上記の季刊誌第4号の「座談会：外文明と内世界をめぐる」に示されたとおりである。

第二に、東南アジアの時間論、歴史観、死生観のような文化の根幹にかかわるところから、現在の国家体系や国民統合の問題をあらためて考えてみようという視点が提示された。これらの点は、理論研究として行われるよりも、個別の具体的な事象を通して行われるべきであるという共通の理解が示された。

第三に、他の研究班と積極的に交流を行ない、そこからいくつかのよい成果が生まれた。計画研究B02班のほか、公募研究班とも研究交流を行ない、国民国家論についての新しい視角を与えられた。

5. 今後の課題

今後の課題として以下のことが挙げられる。

(1) 「外文明と内世界」をめぐる諸概念の精緻化

この点については、班員だけでなく、ひろく共同研究と研究交流を通じて課題を達成していきたい。

(2) 「外」と「内」の境界性への注目

上の理論的な作業の中でもとりわけ重要であると考えられるのは、「外」と「内」の境界性をめぐる問題である。

すでに今年度の研究においても、「ディアスポラ」、「フロンティア」、「メスティーソ」、「クレオール」等、境界を越えるもの、両属的もしくは無所属的なものこそが、変化のダイナミズムをひきおこしたり普遍的原理を定着させたり、新しい統合原理を樹ち立てたりするという視点がくり返し提示されてきた。したがって「外文明」対「内世界」という二項対立的な認識わく組を対象化するために、このような「境界性」にかかわる要素について特に留意していきたい。

(3) 比較の視点の重視

われわれの研究班は、東南アジア地域の研究者とそれ以外の分野の研究者（日本、西欧）とがほぼ同数からなる。この特徴を生かすために、東南アジアが外からどのように見えるのか、また、東南アジア的なダイナミズムを日本や西欧に適用すると、どの点でどのように不都合が生ずるのか、あるいは逆に、日本や西欧の特色がよくみえてくるのかという、空間的な比較を重視したい。

しかしそれとともに、方法的にも、歴史学、法制史、文明論、教育学、国際関係論、等多様なので、方法論の間の比較と相互交流についても留意したい。

(4) 個別の研究成果の重視

上に述べた方法論的検討や比較の視点は、それ自体として抽象的に論じられても、余り生産的ではない。それらは、個々の実証的な個性の中に生かされてこそはじめて有意義となる。そのため、個々の研究者は、個別具体的な現象の中に「外文明と内世界」というパラダイムをどのように取り入れていくかを問われることになるだろう。

その結果、地域研究の方法論が個別の作品の中に生き生きと息づくようになれば、われわれの研究は目標に大きく近づいたことになる。

これらのことを実現するために、共同研究、個別研究を積極的に推進し、必要に応じてさまざまな分野の専門家と内外を問わずに知的交流をはかり、さらに国内はもとより海外での学術調査を遂行する予定である。

6. 研究業績（平成5年度発表分）

土屋健治

「戦後日本植民地研究史：東南アジア（インドネシアを中心に）」浅田喬二編『近代日本と植民地：支配と統合の論理』岩波書店，pp. 307-312, 1993.

「Culturalismについて」『東南アジア：歴史と文化』22：201-218, 1993.

「東南アジアの脱植民地化」三谷太一郎編『岩波講座 近代日本と植民地 8 アジアの冷戦と脱植民地化』岩波書店，pp. 71-100, 1993.

「文化の翻訳——意味空間のなりたち」矢野暢編『講座現代の地域研究第1巻 地域研究の手法』弘文堂，pp. 197-223, 1993.

「創られる国民国家——インドネシア独立記念日考」矢野暢編『講座現代の地域研究第3巻 地域研究のフロンティア』弘文堂，pp. 225-246, 1993.

「直線的時間と循環的時間——ジャワの時間論」矢野暢編『講座現代の地域研究第4巻 地域研究と「発展」の論理』弘文堂，pp. 57-90, 1993.

「植民地空間と大衆文学の成立——19世紀末のバタヴィアにて」中嶋昌彌編『ポピュラー文学の社会学』世界思想社, pp. 247-269, 1994.

「パランツリティス考——ジャワの『内』と『外』」『総合的地域研究』No. 4 : 12-15, 1994.

白石昌也

「ベトナムの脱植民地化」三谷太郎編『岩波講座 近代日本と植民地 8 アジアの冷戦と脱植民地化』岩波書店, pp. 159-180, 1993.

「ファン・boy・チャウの史蹟——ベトナム調査旅行から」『南方文化』20 : 105-123, 1993.

西村重夫

「学校のある風景」宮崎恒二・山下晋司・伊藤眞編『アジア読本インドネシア』河出書房新社, pp. 262-268, 1993.

「国民統合と教育——マレーシア・サバ州・N小学校の変容をめぐって」『東南アジア研究』31(4) : 3-22, 1994.

「人間形成のアジア的風土」『総合的地域研究』No. 4 : 16-18, 1994.

弘末雅士

「北スマトラにおける港市国家と後背地」『東南アジア：歴史と文化』22 : 3-35, 1993.

「東南アジア像」溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『交錯するアジア』東京大学出版会, pp. 77-104, 1993.

「『近世』東南アジアにおける港市と後背地」『歴史雑誌』102(12) : 106, 1993.

「外文明と内世界：スマトラモデル」『総合的地域研究』No. 4 : 5-8, 1994.

園田英弘

「外文明と内世界：日本のケース」『総合的地域研究』No. 4 : 3-4, 1994.